同じなの?

初風舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じなの？

【Ｎコード】

Ｎ５１１８ＢＡ

【作者名】

初風舞

【あらすじ】

エブリスタで初風舞としてアップした小説（？）です

他のサイトでアップしている小説です。

「なぁ、味覚って人それぞれだよな？」

「……」

「えっと……聞いてる？」

「どちら様でしょうか？」

「……酷い。友達だと……」

「いや、読者の皆さんはそう思うかなと」

「読者ってなに！？」

「この会話さ、後から小説にするからさ」

「……」

「で……人の味覚がなんだって？」

「いやいやいや、小説ってなに？」

「何って……、近代文学の一形式。作者の作り出した人物や事件などを通して、社会や人間のありかたをえがこうとする散文の作品。角川学芸出版／角川必携国語辞典より」

「はあ……。お前に聞いた俺がバカだったよ」

登場人物

初風舞（作者）

　某大学に通う学生。現在、二年生である。学ぶのは好きだけど勉強が嫌い。そのため頻繁に講義を……。唐突に友人に質問をぶつけ、度々困らせている。

山崎優（やまざきゆう）
　初風舞と同じ大学に通う学生。現在二年生。初風とは幼なじみである。初風の質問に日々苦悩している。

以上

作者に山崎という幼なじみはいません。よってフィクションです。

「なんだ優、お前実在しないのか」

「実在してるわ！お前が勝手に架空の人物にしたんだろ。今知りましたみたいな顔すんじゃねぇ」

「わかったわかった。お前は居るよ、うん」

「泣きたい……。もういい、いい加減話進めよう」

「そうだな、俺もいい加減疲れてきた」

「……」

「で、人の味覚がなんだって？」

「人の味覚ってそれぞれだよなって聞いたんだよ」

「例えば？」

「俺はチーズが食えないんだけどさ、舞は好きだろ？」

「あぁ、好きだな」

「だから、人それぞれだなって」

「うん、帰っていいか？」

「なんで！？」

「あまりにも下らないこと聞くもんだから」

「ちょっ…、それじゃ小説にならないだろ」

「なんだ、優、お前小説に以外と乗り気だな」

「いや…、それは…そのっなんだ…なんか面白そうだし」

「小説にしたいならもう少し話広げろ」

「広げろってもな…」

「使えねぇ野郎だ、これだから素人は」

「お前も素人だろぉ！なんだよ、そんなこと言うなら、舞、お前が話広げてみろよ！」

「そう来たか」

「ほら、広げてみろよ！」

「そうだな、じゃあ、こんなのはどうだろう」

「へ？広がるの…」

「ああ、ちょっと待ってろ」

「あったあった、これだよ。優、これなにかわかるか？」

「なにって…林檎だろ？」

「そうだな、林檎だ」

「それでどう話を広げると？」

「まぁ、食い物ならなんでもいいんだが。お前、林檎は好きか？」

「まぁ、普通に食うけど」

「普通ってなんだ？お前の普通の価値観なんか俺には分かりゃしないんだ」

「あぁもう、いちいちうるさい野郎だな。好きだよ、林檎おいしいよ」

「うん、俺も好きだ。というわけで食べる」

「どういうわけかな！？」

「ほら、優、お前一口食え」

「えっ、俺も？」

「うまいか？」

「まぁ、ふつ…うまいな」

「そうだな、じゃあここでひとつ聞こう。俺が食った林檎とお前が食った林檎は同じものか？」

「…？何言ってるのか分からないんだけど」

「要は、俺が見てる林檎とお前が見てる林檎は同じ物体なのかって

ことだ」

「当たり前だろ、林檎ひとつしかないし。それにほら、かじった跡だって二つある」

「そうだな、二つある。でも、お前は味覚は人それぞれって言ったよな？」

「ああ、それがどうしたっていうんだよ」

「今食べた林檎は二人ともうまいと言った。でも、お前が例えに出したチーズは二人の意見は違う」

「ああ」

「意見が違うのはなぜか？」

「味覚は人それぞれだからだろ？」

「本当にそうか？実は人の味覚は皆全く同じで食べ物の方が変わってるんじゃないか。さっきの林檎は俺が食った後に偶然にた味になって二人ともおいしく感じたんだよ」

「はぁ！？んな分けねぇだろ。」

「なんでそんなこと言えるんだよ？」

「そんなのは成分を調べれば分かる」

「科学に頼ると？」

「ああ」

「それはなぜだ？」

「なぜって、そりゃ科学が正しいからだろ」

「じゃあ聞くが、科学が正しいことを誰が証明したんだ？もちろん、お前は科学が正しいことを証明できるから、科学を頼るんだよなぁ？」

「な、なんだよそれ！そんなのは暴論だ！それだったらお前は自分の考えを証明できるのかよ」

「無理だ」

「……え？もう一回言って？」

「だから、無理だ。そもそも俺は証明の必要はない」

「なんでだよ。俺は証明が必要なのに…」

「飽くまで可能性を示しただけだからな。だがお前はどうだ？科学を信じるからこそ、成分を調べると言ったのだろう？ならば科学を証明できなきゃならない。それが出来れば俺の可能性は消えるからな。そう思わないか？」

「……」

「お、沈黙か？議論に際しての沈黙は敗けを意味するぞ？」

「もういいよ、敗けたよ」

「まあ、俺の考えなんであり得るわけないけどな。じゃあ、今日は

帰るわ！またな」

「何なんだよぉ！もう来るんじゃねぇ！」

ども初風です（＾－＾）

どうでしたでしょうか？

このお話は単純に味覚の違いから着想したものです。

あとシュレディンガーの猫もきっかけになりました。箱を開けてみるまで分からない的な（笑）

同じもののはずなのに好き嫌いがある。

単に主観の問題だと言われたそれまでですが、それじゃつまらないじゃないですか。

わかりにくいところもあったでしょうがこれからもよろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5118ba/

同じなの?

2012年1月14日02時48分発行